

Nicolaus de Cusa の non aliud について

大 出 哲

Nicolaus de Cusa は、De non aliud において、こう言っている：「これ (non aliud 「他なものでない」) は、わたくしが、長い年月の間に、対立するものどもの一致によって探求してきたところのものです。」(NA. IV; 9,9) これに関して、Ludwig Baur は、「non aliud という神の概念は、神における対立するものどもの一致の概念の結論であり戴冠である。」と言っている。とすれば、De docta ignorantia における万物の展開と包含の思想は、De non aliud において詳細に論じられている non aliud の概念との関係において、より完全に説明されうるはずであるし、また、non aliud の概念は、De docta ignorantia との関係において、より容易に理解されうるはずである。こうしたことに、この研究の意図は関係する。すなわち、本誌IV所載の拙稿において十分に解明されていなかった聖三位一体からの諸事物の三一的な下降を、non aliud の概念への関係において説明し、かつ、諸事物のこの三一的な下降のうちに、non aliud 自体の definitio を見よう、とわたくしは欲する。

第一に、諸事物の・non aliud 自体への移入について論じられる。

第二に、non aliud 自体からの・諸事物の三一的な下降について論じられる。

第三に、non aliud 自体の definitio について論じられる。

1. Nicolaus によれば、最も厳密で最も真なる定義は、non aliud による定義であって、 $\langle A \text{ est non aliud quam } A. \rangle$ (Aは、Aとは他なものでない。)と言表される。Aには、いっさいのもの、non aliud 自体さえも代入される。 $\langle \text{Caelum est non aliud quam caelum.} \rangle$ $\langle \text{'Non aliud' est non}$

aliud quam ‘non aliud’ 等々。したがって、non aliud は、それ自身と他のいっさいのものとを定義する、と言われる。ところで、神であるところの第一原理は、自分自身の definitio であるとともに、「原理から生じたものの存在根拠すなわち definitio である。」(NA. II; 5, 27) それゆえ、non aliud がもっている力と神がもっている力とのあいだに存するアナログによって、われわれは、non aliud を、神を表示するために使用しうる。これが、神の最も厳密な表示である。

Nicolaus によれば、存在の原理は認識の原理でもある。non aliud 自体は、存在と認識の原理である。それゆえ、「そのうちには、一切のものが存在し認識され見られる」(NA. V; 11, 20) はずである。従って、可能性(質料)と形相とそれらの結合との三一である事物は、三一的に non aliud 自体のなかへと持ち込まれる。ところで、non aliud 自体は、‘non aliud’ est non aliud quam ‘non aliud’ と定義される。この命題の第一の non aliud は御父(絶対的な可能性)を、第三の non aliud は御子(Verbum, 絶対的な形相)を、第二の non aliud は聖霊(絶対的な結合)を意味する。従って、一切の可能性は第一の non aliud のうちに、一切の形相は第三の non aliud のうちに、一切の結合は第二の non aliud のうちに存在することになる。このことから、本文の schema 1 がえられる。

2. 上述の non aliud の定義について、Nicolaus は、「第一原理が non aliud によって表示されてそれ自身を規定する(definire)とき、その規定の運動のうちに、non aliud から non aliud が生じ、さらに、non aliud と生じた non aliud とから non aliud にかんする規定が帰結される。」(NA. V; 13, 17) と言っている。この命題は、神にあっては見ることは規定することであるがゆえに、また、上述のように、おのおの non aliud は御父、御子、聖霊を意味するがゆえに、こう言いかえられる：神が自分自身を見るとき、その見ることのうちに、御父から御子が生まれ、御父と御子とから聖霊が進み出る。この永遠な自己直観のうちに、神は被造物なし

にとどまりえた。しかし、かれは、かれ自身の栄光を示すために、万物を創造した。創造にさいして、神は、自分自身を見るあの視 (visio) によって、同時に万物を見た。創造とは、non aliud 自体が自己規定によって aliud を引き出すことである。

だが、この aliud は、non aliud 自体の自己規定から下降するのであるから、non aliud の類似を持たねばならぬ。この類似は、«aliud est non aliud quam aliud.» (NA. I; 5,2) ということである。したがって、創造は、non aliud 自体から non aliud が下降することでもある。

この下降は、本文の schema 3 に示されているように、宇宙を介して三一的になされる。こうして、non aliud 自体は、万物のうちに non aliud として三一的に存在する。

3. Nicolaus によれば、事物の何性は三様の仕方で存する。第一に、事物の何性は、non aliud 自体すなわち絶対的な何性として神のうちに存する。これが、最も厳密で最も真なその存在の仕方である。第二に、それは、縮限された何性として、知性のうちに存する。第三に、それは、特殊的な仕方で感覚のうちに存する。

第一の仕方にしたがって、最も厳密な定義の仕方 «A est non aliud quam A.» が存する。それなしには或るものの自分自身との同一性が存しえないところの non aliud が、神である non aliud から下降するからである。そこで、non aliud 自体へと上昇して、我々は、あの定式が、或るものの自分自身との同一性だけでなく、神である non aliud 自体が諸事物から他なものでないことをも意味することを知る。例えば、«terra est non alia quam terra.» は、terra の自分自身との同一性だけでなく、non aliud 自体である terra が、aliud である terra から他なものでないことをも意味する。

non aliud 自体が万物を definire するということは、或る被造物の自分自身との同一性だけでなく、神が万物から他なものでないこと、すなわち、神が万物を創造し、保存し、支配することをも意味する。